

福岡大学医学会ニュース

第 14 号
福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区 東那珂一丁目10-15

臨床薬理学について

薬理学教授 古川 達雄



今回短期在外研究員として Psychopharmacological Research Laboratory, Sct. Hans Mental Hospital, Roskilde, Denmark および Istituto Di Ricerche Farmacologiche "Mario Negri", Milano, Italy を中心としてヨーロッパに三ヶ月滞在し、研究の交流を行うとともに、臨床薬理学についての情報も集めた。今回得られた情報ならびに約七年前に臨床薬理学研究振興財団よりの海外留学等補助金を受けて欧米を視察した際のものを加えて、重視されてきた臨床薬理学についての海外の実情につき簡単に述べる。

臨床の方々には、自分達は長い間臨床の現場で充分に考えながら薬物療法を行ってきたというので、今さら臨床薬理学という新たまったものが必要なのではないかとお考えもあるかと思えます。しかし薬物をめぐる背景は大きく変化し、(一)昔に比して多数の薬物が臨床に使用されるようになり、個人やあるグループ内だけの経験や情報だけでは追いつかなくなってきた。(二)作用や副作用にきき動物間の種属差は知られてきたが、SMON 病、サリドマイド児の発生など動物ではみられなかった重篤な副作用の発現などがあって、改めて動物とヒトの差の重大さが認められ、ヒトにおける薬理学の重要性が更に認識されたこと、(三)学問の進歩に伴って新薬が次々に導入され、今後もユニークな薬物を求めた研究が益々進められてゆく状況のもと、その臨床評価が重要となってきたこと、その他の理由により、ヒトにおける膨大な薬物情報を整理し、体系づけ、更に薬物療法の理論づけを行い、これらに基づいた適切な薬物療法を行うことが必要となり、臨床薬理学が重要な学問となってきた。しかし、本学間は境界領域のものであることから、実際には機能しにくい面がある。

大学および大学病院において臨床薬理学の最も盛んな国はスウェーデン、イギリス、スイス、ドイツおよびアメリカで、イタリア、オーストリアおよびフランスはこれに比べればやや低い。スペインではイギリスなど臨床薬理学のトレーニングを受けた人などが一部支えているが、その全体的な活動は更に低い。施設、機構、スタッフ、ならびにその活動状況などは、各国、各施設によって多様である。これらを少し整理・分類して述べる。

一、臨床薬理学が Department として独立しているものである。これは二種あり、一つは chairman が医師で臨床薬理学者ではあるが基礎側に近く、直接外来にタッチすることなく、またベッドもないが、臨床の要請に応じて薬物療法に必要な種々の情報を提供し、また患者にも接して薬物に関する診断・治療に与る。本臨床薬理学教室の構成もこのタイプは薬学その他の出身である Ph. D. 内科・麻酔・小児科・産婦人科・精神科その他の臨床の専門領域の医師より成り、臨床薬理の背景をもつ M. D. が臨床と兼任で構成メンバーとして入っている。

二、このような形で最も充実して活発な活動を行っているのは、ストックホルム大学の内でも新しく郊外に設立された Karolinska Hospital における Prof. Sjostrom の主権する臨床薬理学教室である。これは多くのスタッフから成り、その活動内容は、①教育：医学部教育および卒業後教育として臨床薬理の教育およびトレーニングを行い、また病院全体における臨床薬理に関する定期的なセミナーを主催する。②病院へのサービス：薬物の選択、治療効果

業近い五年目に薬物治療の講義を行っている。講義終了後には何回かの試験を合計して、最終的に臨床薬理の単位がとれるようになっている。Prof. Laurence は基礎の薬理学教室のスタッフも併ねているが、基礎の薬理においても特に実習等で学生自らが被験者になり、笑気、筋弛緩薬、局所麻酔薬、点眼薬を使用して、ヒトにおける薬理学の教育が重視されている。もっとも、その背景にはイギリスでは動物愛護の精神から、特に新しい成果の生まれる見込みのない実習などに動物を使うのに反対する意見が強いこともあ

二、臨床の教室がその専門の診療科目の名称をもち、その専門の活動をするように臨床薬理としての活動も行っているものである。先進諸国では臨床家の臨床薬理に対する理解・興味が大きく、両面にわたって活発な活動を同時に進めていることが多い。たとえばストックホルム大学のカロリンスカ病院の Prof. Sedapoll の主権する精神科、ロンドン大学の King's College 病院の Prof. Kakkar の主権する外科などは、それぞれ専門医として医療に励むと同時に、前者は向精神薬、後者は血栓症治療薬の臨床薬理に、既述の臨床薬理学教室に類する活発な活動を行い、さらに必要の際は基礎教室との協同も行っている。

またバゼル大学では、大学病院の内科の一部門として臨床薬理学教室があり、Dr. Pollath は、循環器の担当として病院内にオフィスをもち、研究は中央施設で行っている。薬物血中濃度の測定法を独自に開発出来るようなスタッフと設備があり、そのスタッフがルーチンの薬物血中濃度測定も行っている。教育については、バゼル大学と同様、内科の臨床薬理のスタッフと基礎の薬理学教室のスタッフがチームにより交代

- ### 臨床薬理学の教育・研究の内容
1. 総論
 - 1) 薬物療法の効果に影響を与える薬物以外の要因
 - 2) 血中薬物濃度の測定
 - 3) 薬物代謝
 - 4) 薬物動態論の基礎
 - 5) 薬物の有害作用
 - 6) 薬物相互作用
 - 7) 病態時における薬物動態・薬物反応
 - 8) 臨床中毒学
 - 9) 老人および小児における薬物療法
 - 10) 薬物投与設計
 - 11) 処方原則
 - 12) 新薬の前臨床ならびに臨床評価
 - 13) 薬物情報とその利用
 2. 薬物療法の理論と実際
 - 抗精神薬、抗不安薬、降圧薬、利尿薬、化学療法薬その他約12項目にわたる各論
 3. Therapeutics-case Report and Drug Discussion

福岡大学医学会総会・例会の報告

日時 昭和61年7月23日(水) 午後3時より

場所 福岡大学医学部臨床大講堂

第九回総会

議事

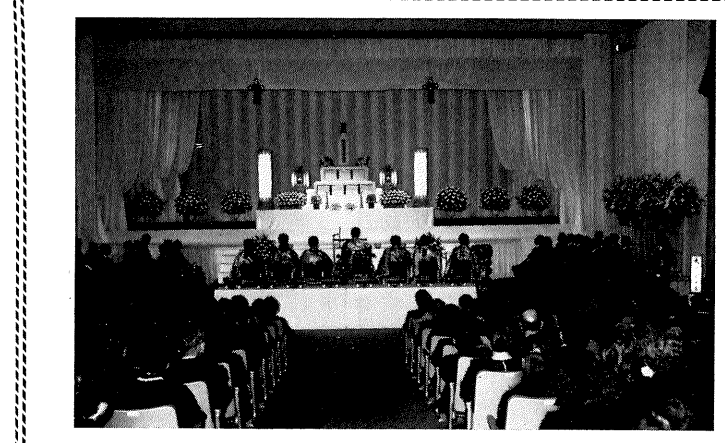
- 1、報告事項
- 2、役員改選
- 3、60年度会計報告ならびに61年度予算(案)
- 4、その他

第十五回例会

特別講演

- 1、座長 西園 昌久教授
「メンタリー・クリニックにおける研修」
- 2、座長 堤 啓助教授
「消化器病に対する最近の実験的・臨床的研究について」
- 3、座長 神代龍之助教授
「法医学からみた突然死」
- 4、座長 菊池 昌弘教授
「法医学からみた突然死」

法医学 柏村 征一教授

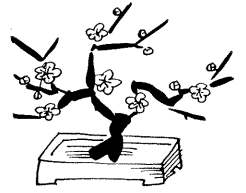


今回祀られた霊位は、学生の医学教育のために系統解剖に献体された三十三名、さらに、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を承諾下さった百二十五名の合計で百六十一名であった。医学の発展は治療の進歩、人類の福祉を究極の目的としており、そのためには人体の構造やはたらきを冷静に見つめなければならぬ。菊池医学部長は祭詞の中で、「近年、医学は急速な進歩を遂げたものの、未解決の分野も数多く残されており、従って、その解明に努力を傾けることが、献体いただいた方々やご遺族のお心にそつことと信じ、今後、これらの尊いお芳志にそつよう勉学、研究、さらに診療に一層の精進をします」と新たな誓いを披瀝された。

医学の発展のために 第十三回医学部慰霊祭

第十三回福岡大学医学部慰霊祭は、遺族および来賓の方々、それに、本学教職員や学生など約六〇〇名が参列し、昭和六十一年十月二十五日午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われた。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育のために系統解剖に献体された三十三名、さらに、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を承諾下さった百二十五名の合計で百六十一名であった。医学の発展は治療の進歩、人類の福祉を究極の目的としており、そのためには人体の構造やはたらきを冷静に見つめなければならぬ。菊池医学部長は祭詞の中で、「近年、医学は急速な進歩を遂げたものの、未解決の分野も数多く残されており、従って、その解明に努力を傾けることが、献体いただいた方々やご遺族のお心にそつことと信じ、今後、これらの尊いお芳志にそつよう勉学、研究、さらに診療に一層の精進をします」と新たな誓いを披瀝された。



する教授のために、女子学生によるチェンバロとフルートの演奏が行われたのは、ドイツならではの濃緑のマントをまとい白手袋をは

教室 便 り

学位取得

溝口 強 美

(脳神経外科)

福岡大学に提出。昭和六十一年十一月十三日付で医学博士授与。論文「Effects of cortical and subcortical lesions on electroencephalograms in cats with special reference to topographic computer display of delta activity。」

受賞

向野 義人(内科学第一)

代田 貴

研究業績「肥満に対する減量法の有効性と機序」
鍼灸の基礎的・臨床的研究、技術の開発に関する研究、鍼灸学術の発展向上に寄与する判断された。

池田 靖洋(外科学第二)

第十一回村上記念「胃腸」賞

研究業績「内視鏡的乳頭括約筋切開術の長期成績」再発結石と胆嚢無石・有石例の検討を中心として
後藤 勝弥(放射線医学)

アメリカ神経放射線学会

Corresponding Member

(客員特別会員)

アメリカ神経放射線学会会員の推薦と評議員会の承認を得て、これからのアメリカに於ける学会活動、教育活動に於いて贈られた。
日本人では、熊本大学の高橋教授に次ぐ二人目である。

山田 英智(解剖学第二)

日本電子顕微鏡学会第一回論文賞

研究業績「An improved device for rapid freezing using liquid helium。」

学術交流

昭和六十一年四月以降の海外留学又は海外出張者は以下のとおり。①研修先②目的③期間

海外留学

浦田 秀則(内科学第二)

Cleveland Clinic Research Institute, U.S.A.
②牛嶋賢一(内科学第二) ③牛嶋賢一(内科学第二) ④牛嶋賢一(内科学第二) ⑤牛嶋賢一(内科学第二) ⑥牛嶋賢一(内科学第二) ⑦牛嶋賢一(内科学第二) ⑧牛嶋賢一(内科学第二) ⑨牛嶋賢一(内科学第二) ⑩牛嶋賢一(内科学第二) ⑪牛嶋賢一(内科学第二) ⑫牛嶋賢一(内科学第二) ⑬牛嶋賢一(内科学第二) ⑭牛嶋賢一(内科学第二) ⑮牛嶋賢一(内科学第二) ⑯牛嶋賢一(内科学第二) ⑰牛嶋賢一(内科学第二) ⑱牛嶋賢一(内科学第二) ⑲牛嶋賢一(内科学第二) ⑳牛嶋賢一(内科学第二) ㉑牛嶋賢一(内科学第二) ㉒牛嶋賢一(内科学第二) ㉓牛嶋賢一(内科学第二) ㉔牛嶋賢一(内科学第二) ㉕牛嶋賢一(内科学第二) ㉖牛嶋賢一(内科学第二) ㉗牛嶋賢一(内科学第二) ㉘牛嶋賢一(内科学第二) ㉙牛嶋賢一(内科学第二) ㉚牛嶋賢一(内科学第二) ㉛牛嶋賢一(内科学第二) ㉜牛嶋賢一(内科学第二) ㉝牛嶋賢一(内科学第二) ㉞牛嶋賢一(内科学第二) ㉟牛嶋賢一(内科学第二) ㊱牛嶋賢一(内科学第二) ㊲牛嶋賢一(内科学第二) ㊳牛嶋賢一(内科学第二) ㊴牛嶋賢一(内科学第二) ㊵牛嶋賢一(内科学第二) ㊶牛嶋賢一(内科学第二) ㊷牛嶋賢一(内科学第二) ㊸牛嶋賢一(内科学第二) ㊹牛嶋賢一(内科学第二) ㊺牛嶋賢一(内科学第二) ㊻牛嶋賢一(内科学第二) ㊼牛嶋賢一(内科学第二) ㊽牛嶋賢一(内科学第二) ㊾牛嶋賢一(内科学第二) ㊿牛嶋賢一(内科学第二)

井上 登生(小児科)

②University of London, British Postgraduate Medical Federation, Institute of Psychiatry
③Institute of Psychiatry & Institute of Child Health Post-Graduate Diploma in Child & Adolescent Psychiatry ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

辻 祐治(泌尿器科)

②アメリカ合衆国・クリウランドクリニック腎血管性高血圧症の研究 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

黒木 政秀(生化学第一)

②アメリカ国立衛生研究所(NIH) ③腫瘍抗原の分子生物学的研究 ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

荒川規矩男(内科学第二)

②Honningsvåg, Norway ③International Meeting on Current Problems in Clinical Hypertension ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

吉田 稔(内科学第二)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

The Cambridge Conference ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

荒川規矩男(内科学第二)

②Heidelberg, West Germany & Washington, U.S.A. ③11th Scientific Meeting of International Society of Hypertension ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

山田 英智(解剖学第二)

②アメリカ合衆国・スタンフォード大学医学部客員教授 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

河田 博(生理学第二)

②アメリカ合衆国・心筋の膜電位および興奮収縮連関に関する研究 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

松岡 雄治(生化学第一)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

古川 達雄(薬理学)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

古川 達雄(薬理学)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

岩崎 宏(病理学第一)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

来 訪

昭和六十一年四月以降、本学医学科または病院を訪れた外国学者は以下のとおり。①所属②目的③来訪日

Prof. Jules Constant

②ニューヨーク州立大学医学部教授 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Otto F. Kenberg, M.D.

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

浅倉 稔生(米ペンシルバニア大学)

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

F. G. Pearson

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

William F. Hoyt

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Prof. Dr. Spellenberg

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Prof. Yoshio Hosobuchi

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

麻酔学会 特別講演 "Electrical stimulation therapy for chronic pain." ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Dr. A. B. Maunsbach

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Dr. E. Skriver

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Henry H. Swain

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Thomas M. Wolf

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Prof. Dr. Spellenberg

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Prof. Yoshio Hosobuchi

②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

Prof. Yoshio Hosobuchi

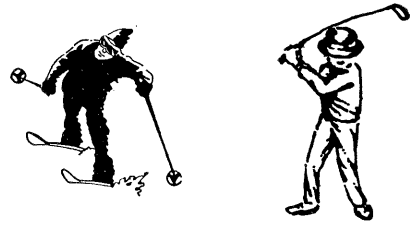
②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

(3面よりつづく)

小川皓一(解剖学第二): ①Inter-cellular junctions in lymphatic nodule associated epithelium of the rabbit appendix. ②第11回国際電子顕微鏡学会 ③京都 ④61.9.1~9.7
山田英智(解剖学第二): ①The myelinated ganglion cell in the parakeet retina. ②第7回 ICER ③名古屋 ④61.9.25~9.30
今永一成(生理学第一): ①Cell-to-cell coupling as revealed by diffusional studies. ②International Symposium on Cardiac Electrophysiology. ③Bern. ④61.9.10~9.11
今永一成(生理学第一): ①Contractile rebound of canine atrial muscle after removal of acetylcholine. ②10th Europe Workshop on Cardiac Cellular Electrophysiology. ③Bern. ④61.9.12~9.13
河田 博(Sumida, S., Yamaguchi, A. & Kawata, H.) (生理学第二): ①Fibrillation and contraction tracings from adult rat heart after freezing in liquid nitrogen for ten years. ③1st Asian-Pacific Symposium on Cryosurgery. ③Tokyo. ④60.11.15.
松岡雄治・黒木政秀(生化学第一): ①An attempt to establish a radioimmunoassay system for CEA with improved cancer-specificity by using mono-

clonal antibodies. ②6th Int. Congr. Immunol. ③Toronto (Canada). ④61.7.
松岡雄治・黒木政秀(生化学第一): ①Epitope mapping of the CEA molecule by monoclonal antibodies and an RIA with improved cancer specificity. ②14th Annu. Meet. Int. Soc. Oncodevelop. Biol. Med. ③Helsinki (Finland). ④61.8.
岩崎 宏・諫山照刀(病理学第一): ①Monoclonal antibodies to human malignant fibrous histiocytomas (MFH). ②XVIth International Congress of the International Academy of Pathology. ③ウィーン ④61.8.31~9.5.
菊池昌弘(病理学第一): ①Immunopathologic study of peripheral T cell malignancy and its related disorders in Japan. ②日中血液シンポジウム ③天津 ④61.9.15~9.17.

the cardiac dysfunction in patients with mitral valve prolapse: Dose vs effect & serum level of coenzyme Q₁₀. In: Biomedical and Clinical Aspects of Coenzyme Q₁₀. Ed. by Folkers. Elsevier, Amsterdam ②神代龍之介(外科学第二)・松元輝夫(ハネマン大学教授) 共著③血管外科マニュアル、第2版改定版④へるす出版⑤一九八〇年⑥四・五〇〇円
△利谷昭治・林 紀孝・柴田郷子(皮膚科) ①Practices in Gerontology No. 17 特集高齢者の皮膚病(分担)②サン・薬品株式会社③一九八六
△三好篤彦(解剖学第二)①中



編集後記

福岡大学医学会ニュースも発行を始めて七年になりました。同医学会に関する情報を出来るだけ掲載したいと思っております。掲載すべきニュースや、どのような内容のもの掲載したほうがよいかなど、御連絡下さいますようお願い致します。(T・A・生)